JIC インフォメーション第 156 号（1995 年 5 月 29 日第 3 種郵便物認可）　　2009 年 4 月 10 日発行(1)

JIC インフォメーション

第 156 号 2009 年 4 月 10 日
年 6 回 1･2･4･6･9･11 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所：JIC 国際親善交流センター　発行責任者：伏田昌義
http://www.jic-web.co.jp
東京オフィス：〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL：03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪オフィス：〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-1-22 ﾌｪｱｽﾃｰｼﾞ大手前ﾋﾞﾙ 5F TEL：06-6944-2315　jicosaka@jic-web.co.jp

ロシア・旧ソ連　国際交流誌

JICのイベントへようこそ！

http://www.jic-web.co.jp

＜ 写真 ： 過去の JIC イベントの様子 ～東京ロシアンフェスタ、大阪 JIC フェアー2008～ ＞

「人的交流を通して見た日本とロシア」
ＪＩＣロシアセミナー講演録（後半）　渡邉　雅司・・2-6P
ロシアンカフェ報告　五十嵐　真夕・・・・・・・・7P
「ロシア・旧ソ連製旅客機を訪ねて」第 3 回　Yak-42
鈴木　一、平井　伸彦・・・・・・8-9P
ワガノワ・バレエ・アカデミー来日 REPORT
浦林　裕理・・・・・・・10-11P
＜連載＞「エクメネの最果てへ」ーサハ共和国 冬の旅ー
岡本　健裕・・・・・・・12-13P
ロシア情報・ＪＩＣ情報・・・・・・・・・・・・14-16P

JIC では、Ｊクラブ（JIC 友の会）会員を募集しています。
年 6 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JICロシアセミナー講演録

人的交流を通して見た日本とロシア

渡邉　雅司（東京外国語大学・教授）

2008 年 11 月 15 日(土)、東京外国語大学の渡邉雅司教授を講師にお招きし、JIC ロシアセミナーを開催しました。

前号に引き続き、今回はその後半をご紹介します。

◇岩倉使節団との交友

冒頭(前号)で触れたメーチニコフと岩倉使節団との出会いについて、もう少し述べておきます。これは私自身、30 年も研究しているのですが、『まさかメーチニコフは岩倉使節団と会ったりしてないよな』と思っていたのです。今は滑らかに話していますが、はじめは断片的な資料があるだけで、しかもその資料がロシアにあったりフランスにあったり、いろんなところにありますから、それらをつなぎ合わせるのは意外と難しいのです。ただ、研究する場合も、留学する場合も、ある種の想像力というのは非常に大事ですね。空想力と言ってもいい。妄想では危ないけど、空想する力があれば、いろいろな可能性が向こうから寄ってくる。

私が以前翻訳したメーチニコフの著作があるのですが(「亡命ロシア人の見た明治維新」講談社学術文庫)、その中でメーチニコフは岩倉使節団の動向を非常に詳しく述べています。岩倉具視や大久保利通、木戸孝允の人物像とその特徴を見事に挙げている。はじめは『見たような嘘をつくな』と思っていたのですが、実は私がその後「回想の明治維新」(岩波文庫)と題して訳出したメーチニコフの著作の元になる記事が、ロシアの日刊紙に 2 年間にわたって(1883-84 年)不定期に連載されていたのを見つけて、コピーを取り寄せて読んでみたら、なんと彼は実際に岩倉使節団と出会っているということがわかった。大山巌との関係でも相当深い絆が出来たとは思うのですが、岩倉使節団と出会わなかったらメーチニコフの来日は実現しなかったかもしれない。岩倉使節団というのは当時の政府の閣僚が大勢入っていたわけですから。日本に残っているのは西郷隆盛や大隈重信くらいです。つまり、半分以上の政府高官たちと付き合っていたわけですね。ちなみに木戸孝允の日記にも出てきます。ただしメーチニコフのことをメッチャコフと書いている。他の人はメリチコフとも書いている。日本に来た時の横浜での乗船名簿も調べたのですが、それによるとメッチンクフになっていました。メーチニコフというのはフランス語で書くとたぶん発音しにくいんでしょうね。

ジュネーブでメーチニコフはまず最初に木戸孝允と会う。木戸孝允は日本に戻ると文部卿(文部大臣)になる。先走って言うと、その文部大臣のお陰でメーチニコフは東京外語の先生になるのです。それから回想記を読んでいると、実は自分は西郷隆盛に招かれたと書いてある。驚きじゃないですか。あの西郷隆盛とメーチニコフがどうして関係するのか。実は大山巌は西郷隆盛の従兄なんですね。だから大山は西郷に手紙を書いたわけです。「すごい人がいる」「ロシアの革命家だ。彼こそは日本の役に立つぞ」と。すると西郷から、「江戸にいっぱいいる薩摩藩の人間を教育する私立学校を創ろうじゃないか」、「ついてはその校長を連れて来てくれ」と返事が来ます。こうしてメーチニコフは日本に来るわけです。西郷隆盛には西郷従道(つぐみち)という弟がいます。陸軍大将ですが、その従道の新しい別邸ができたから、そこに住めばいいと。もう何の問題もない。横浜に着けば西郷さんが全部やってくれるからと、口約束だけで彼は船に乗ってしまうのです。それから 50 日経って、日本に着いたわけですが、出迎えはいない。西郷隆盛は征韓論に破れて鹿児島に帰ってしまっており、弟の従道は台湾に出兵していた。西郷従道が台湾出兵(1874 年 5 月、その 3 年前に台湾に漂着した沖縄の船が現地で襲われたことへの報復として明治政府が行なった最初の外征)の総指令官だったのです。そういう訳で出迎えは誰もいない。

◇卓越したメーチニコフの日本観察

ところが、素晴らしいことに、メーチニコフは 50 日間の航海の船の中で、ある日本人と知り合っています。その船には、文部省の命令により帰国途中の 17 人の真面目な日本人留学生が乗り合わせていたのですが、「ヨーロッパで買ったくだらん、つまらん本を大事に抱えてるのがいる」とメーチニコフは彼らを茶化しています。彼は、そういう留学生(インテリ)を相手にしないで、ゲンジロウという、振り分け荷物を持って街道筋を旅しているような商人を相手にします。ゲンジロウと船の上で語り合うのが一番の喜びだったと言っている。ゲンジロウの話には本では読めない日本に関する情報がいっぱい詰まっていたと言うのです。インテリよりも実生活をずっとよく知っている商人の言うことを信じるという、このあたりにナロードニキ、当時ロシアで民衆による革命を起こそうとした人たちをナロードニキといいますが、そのナロードニキの面目躍如たるものがあると思うのです。

そのゲンジロウの家に初めの一晩は厄介になります。もっと泊まって行けというのを断って、彼は翌日、出来たばかりの鉄道に乗って横浜から新橋まで行く。高崎正風という薩摩藩出身の高官の家を自分で訪ねて、どうなっているのかということを確かめに行くのです。横浜のステーションで汽車に乗るのですが、当時の日本人は汽車なんてものは見たことがなかったわけです。ステーションにはものすごい数の見物人が集まっていた。「日本人というのは見物好きだ、新しいものが大好きだ」とメーチニコフは驚きます。さらに群集を見ていて、「日本人はなんて顔が違うんだ」と思います。ヨーロッパ人以上に顔が白いのもいれば、モンゴロイドもいれば、ポリネシア系もいれば、いろいろな顔が混じりあっているではないかと。これは日本人が雑種民族であることを示していると、彼は考えます。単一民族だとは考えなかった。それから、彼が日本に着いたのは 5 月の末ですから、もう蒸し暑くてジトジトしているわけです。見ていると、日本人の肉体労働者はみんな裸になって褌一本になってしまう。当時、キリスト教の宣教団の、特にプロテスタントの宣教団の奥さん達は、日本人がすぐ褌一本になってしまうのを見て、「野蛮だから着物を着せなさい」と政府に言うわけです。明治の初め頃は、「裸取り締まり条例」というのがまともに行われていた。裸の男たちを警官が追っかけていたわけです。ところがメーチニコフはそうではない。裸を見て肉体労働者の筋骨のたくましさに感心する。昔なのでほとんどの人が刺青をしているのですが、その刺青を見て、「刺青こそは日本の肉体労働者にとっての衣服である」と言っている。刺青っていうのはよく見ると襦袢みたいになっている。あれは裸の人間にとっての衣服だと捉えるわけです。裸は野蛮だというような印象は全く無い。

＜サムライ姿のメーチニコフ＞
出典:ユーラシアブックレット 49『明治日本とロシアの影』東洋書店

彼は、絵描きらしい視点でこう言っています。ヨーロッパからアジアに来ると、ペルシャ辺りから色が華やかに、色彩的に派手になるのだけれど、東に行くにしたがって色が無くなっていって単色になっていく。彼は、日本人のことを「紺色の群集」だと表現しました。職人はみんな紺色の着物を着ている。たぶんカスリか何かの着物を見て、全体としてくすんだ紺色の群集というふうに名づけています。それとの対比で、裸の肉体に描かれた刺青が素晴らしいと、偏見なく喜んでしまう。しかも、夏になるとそうやって裸になってしまうということは、日本人の先祖は北方ではないぞと考える。『裸が好きだ。たぶんこれは、南方のマレーやポリネシアからやって来たに違いない』。日本人の起源はマレー・ポリネシア系だと考えて、彼は琉球とアイヌの民俗学的な研究までするのです。

◇東京外語の教師に

それはさておき、薩摩藩子弟のための私学校というのは、結局、西郷隆盛がいなくなってしまったために駄目になります。それで木戸孝允が、「それでは出来たばかりの東京外国語学校魯語科の教授になったらどうか」と言うのです。でもメーチニコフはすなおには喜べない。「なんでアナーキストの俺が聖なる帝(みかど)陛下の国立大学の教授になるのか」と、面白おかしく書いている。「運命のいたずらか」とも書いている。普通だったら喜ぶでしょう。国立大学の教授ですよ。給料は 200 円。今の価値にすれば 200 万円以上でしょう。当時は 1 ヶ月分の給料で家が建つと言われていました。しかし彼は喜ばない。こう言ってよければ、仕方なく彼は東京外語に着任するのです。明治 7 年(1874 年)の 9 月のことです。当時は 9 月に新学期が始まっていました。

東京外語魯西亜語学科のお雇い外国人ですが、第 1 代目がシイドルフ。これは大変なアル中で、ほとんど授業をしなかった。ときどき教壇に立つと、ひどい言葉、罵り言葉を喋り散らして、その次には鼾をかいて眠り出してしまうというような人物でした。それで生徒と取っ組み合いの大喧嘩になって、追い出されてしまう。2 代目はヴィトコフスキー、この人は大変なインテリで、英語もフランス語もドイツ語もわかる素晴らしい教師だと文部省は喜ぶのです。皇居の近くに家を建て、骨董品をいっぱい集めてサロンを開いていたらしい。ところが、ロシアに留学して後に外語の主任教授になる市川文吉という人が戻ってきて表敬訪問したところ、この人が喋った言葉はロシア語ではなかった。ポーランド生まれのユダヤ人なので、おそらくイディッシュ語で喋っていたのですね。それでヴィトコフスキーは独語科に移されてしまった。

これに懲りて、文部省はやっぱり正式な政府機関から雇わなければいけないと考えます。函館のロシア領事館に申し込んでトラクテンベルグという教師免状を持つ外交官を雇いました。彼の給料は 500 円という破格の厚遇です。ところがこれも食わせ者で、彼もまともに授業をやらなかった。当時の契約書に、1 日学校に行けば何日間は休んでもいいと書いてあったらしい。その契約書を悪用して、さぼっていたらしい。文部省が「しっかりやってくれ」というと、今度は外交官の制服を着て来て、自分の後ろにはロシア帝国陸海軍がついているんだぞと脅したといいます。この人は今でも外務省の資料に残っていますが、「到底教師にあらざる人物なり。怠惰であり、どうにもならない」と記述されています。結局、前金を払って辞めてもらうのですが、そこに時を同じくしてメーチニコフが行くのです。

当時の東京外語では、なんとロシアの中学校のカリキュラムをそのままやっていました。要するに、歴史も数学も簿記も全部ロシア語で教えているのです。そこでメーチニコフは数学を教えた。ロシア史は教えさせてもらえなかった。ロシア史はトラクテンベルグが教えました。やはり亡命者だったからでしょう。メーチニコフは一生懸命ノートを作って、代数と幾何を教えた。そのノートが残っています。当時の学生はロシア語のテキストで代数と幾何をメーチニコフに習ったわけです。

メーチニコフが東京外語で教えていた時に、生徒たちに自分の正体を明かしていたのかどうかはわからないのですが、生徒の証言を見ると、彼がどういう人かわかっていたみたいですね。彼は外語にいた1年半の間に、何回か東大から教師に来てくれと誘われています。教師としての、学者としてのレベルが非常に高かったからでしょう。さらに彼の性格的な魅力もあったと思います。彼は足が悪いですから、途中から自分の馬を手に入れて、馬に乗って外語に通っていた。彼はかつてガリバルヂ軍の副官ですから、馬に乗るのはお手のものです。そういう姿にもきっと学生達は憧れたんだと思います。

当時の東京外語の校長は中江兆民です。中江兆民はフランス留学から帰ってきて、明治 8 年 2 月に東京外語の校長になります。兆民は非常にリベラル派で、「東洋のルソー」、自由民権運動の理論的先駆者だったと言われていますが、ところが一面とんでもない人で、外語の校長になるや、規律が乱れているから鞭打ち刑を導入しようと言い出したりもしています。先に述べたとおり、当時の外語の授業は全部その国の言葉でやっています。「13-14 歳で入学してくる子供に日本語を教えないで、外国の言葉だけで授業をやるのは駄目だ」、「こんなことでは日本精神がなくなってしまうので、儒教を教えろ」と言って、兆民は文部省と対立するのです。それで中江兆民は文部省と喧嘩して、結局 3 ヶ月で校長をやめてしまう。その兆民が、メーチニコフのことを、「フランス人でもメーチニコフ君ほどフランス語の演説の上手いのはいない」と証言している。それくらいメーチニコフはフランス語が上手かったということです。

私は最近、東京外国語大学の歴史(全四巻)を編集したのですが、その過程で、自分の足元の東京外大にこんな写真が残っているのを見つけました(5 頁)。真ん中にいるのがメーチニコフです。東京外語の元の建物の前で撮ったものですが、貴重な写真です。明治 7 年でしょうね、きっと。もうひとつ出てきた資料があります。つい最近、学長室の箱の中から出てきたものですが、当時の校長先生が書いたメーチニコフ宛の感謝状です。代々学長が替わっても誰も箱の中を見なかったらしい。100 年以上も箱の中に入っていた。外大が移転することになったので学長室にある箱を開けてみたら出てきたのです。

これを見ると、原稿用紙一枚に学校長渡辺温が、「ロシア語というのは非常に難しくて、ロシア語学科が今にも潰れそうになっていたところへメーチニコフが来てくれた。彼は普通の教師ではなくて、どんどん学生達を惹きつけ、いまや天に中する勢いを見せている。その彼が病気のために帰ってしまうのは非常に残念だけれども、ともかくここで一席設けてお礼をしたい」と書いてある。心のこもった感謝状です。たった 1 年半しか彼は東京外語にいなかった。ガリバルヂ軍時代に負傷して、たぶんその後遺症で貧血がひどく、それで日本にいられなくなってヨーロッパに帰るのです。彼はジュネーブに戻るのですが、その後レマン湖の北にあるモントルーの近くに住んで、晩年の 3 年間はヌーシャテルアカデミーという大学の教授になります。比較地理学と統計学を教えていました。彼は正規の大学は出ていないけれど、各地を放浪し、自分で見て、本を読んで、百科全書的な知識を身につけている。1 年半とはいえ、実際日本にも来たわけです。彼はなんと古事記をフランス語に訳している。『日本帝国 L'empire japonais 』という 700 ページもの日本論を書いています。ところが彼の日本論は何故か世界中の日本学の中ではあまり取り上げられていない。おそらく、彼が亡命者であったということと、ロシア人だったということ、しかも彼の日本に対する視点が非常に時代を先取りしていて、当時の人々には理解できなかったのではないかという気がします。そのせいか、いつしか忘れられた思想家になっていきます。彼は晩年には、『文明と歴史的大河』という遺著を書きます。文明と四大河川との関係、つまりエジプトにはじまって中国に至る4大文明の特色、風土と人間社会の関係を書くわけです。この風土と人間社会のとらえ方が、後に 20 世紀に入って出てくるユーラシア主義の潮流につながっていきます。

◇メーチニコフの教え子たち

そういうわけで、メーチニコフは1年半で日本を去ってしまうのですが、その影響は非常に大きかった。このことを是非みなさんに伝えなくてはいけないと思います。メーチニコフが来てから、文部省は、非常にインテリジェンスが高いということで、これからはロシア語の教師は亡命者に限るといって亡命革命家を呼んでくるわけです。そこで彼らは主に文学を教えるのです。文学を教えるのですが教科書が無い。今のようにコピーもできない。どうしたか。たとえば『罪と罰』などの文学作品を先生がひたすら読むわけです。読み終わると、「はい、この人物の特徴を説明してください」と問題が出されて、学生はロシア語で答えるという、朗読形式の授業をやっていた。今では想像もできないほど高度な授業です。ドストエフスキーでもゴンチャロフでもツルゲーネフでも、ロシア文学というのは会話が非常に多い。会話の多い文章が、全部耳から入ってくるわけです。その授業を聞いた学生の一人が二葉亭四迷です。二葉亭四迷は「言文一致」という

新しい手法を作り出し、近代日本文学の創設者と言われていますが、あれはやっぱりロシア語を耳から学んだということが大きいと思います。口語でもって文章を書いても決しておかしくないということをロシア文学から学んで、候文をやめて、会話文で、口語で文章を書くという実験をしたわけです。そういう風土が東京外語にはあったのだと思います。さらに、ロシアから追放されたさまざまな詩人達の詩を詩集に編んで、それを暗誦させるというような授業もやっていた。東京外語のロシア語の学生たちは、革命運動のためロシアから追放された詩人たちの詩を口ずさみながら神保町あたりを闊歩していた。時は鹿鳴館時代。みんながヨーロッパの服装をして夜な夜な舞踏会をやっていた時です。その時にヨーロッパを批判し、帝政ロシアを批判する、ナロードニキたちの詩を朗読していた外語の露語科の連中というのはちょっと面白いと思うんですね。

しかし、明治18年(1885年)に東京外語は一度潰されます。どうやって潰されたか。今の一橋大学と一緒になります。明治 17 年に東京外語の中に文部省所属の東京高等商業学校が設置されました。一方で明治 8 年ごろにできた一橋大の前身、商法講習所の名称が東京商業学校に変更されて、通産省の傘下に入ります。そこで、同じ名前なんだから一緒にしてしまえという非常に乱暴な考え方で、2 つを合体させてしまい、しかも当時神田の一橋にあった東京外語の校舎に商業学校を持ってきたわけです。結局、ロシア語をはじめ外国語の授業は第 3 部とされ、さらに半年とたたないうちに廃止されてしまいます(その後、明治 32 年に再設される)。その時に外語を辞めたのが二葉亭四迷です。二葉亭四迷は士族の出身です。差別的ですが、「丁稚と一緒に勉強が出来るか」と言って辞めてしまう。その時に一緒に辞めた教師がメーチニコフの教え子で二葉亭の先生だった黒野義文という男です。

◇ペテルブルグ大学の教師になった黒野義文

黒野義文は旗本の出身です。この人は随分面白い人で、外語で教えていた時も、いつも着流しで浪人風の格好をして、なぜか鉄棒を持って歩いていたといいます。授業が終わると学校の前にある牛鍋屋に入って、牛鍋 10 人前とビール 10 本飲んだという、そういう男だったらしい。彼はこの後、家族を捨ててウラジオストクへ行ってしまう。ウラジオストクで何をやったかというと、元旗本で腕が立つので、女郎屋の用心棒をやっていた。ところがそんなことしていてはもったいないということで、ペテルブルク大学から日本語講師になってくれという話が来るわけです。黒野はこれを受けて、シベリア大陸 9000 キロをなんと徒歩で横断した。明治期にシベリアを横断した人のリストがありますが、この中で徒歩で横断したのは黒野義文と嵯峨寿安の 2 人だけです。嵯峨寿安も一時外語の教師をやっていました。外語の教師というのは馬鹿が多いですね。徒歩で横断している。大変な冒険ですよ。黒野義文はその後、終生日本に戻らなかった。彼は 1888 年から 1916 年までペテルブルグ大学で日本語を教え、1918 年、革命後にコレラが蔓延したときに死んでしまうのです。

◇黒野義文の教え子たち

黒野義文の教え子たちがまたすごいのです。

ペテルブルク大学の日本語科で黒野から日本語を習った人物にコンラード(Nikolai Konrad)がいます。ロシア科学アカデミー正会員で、今でも使われている『最新和露大辞典』を編纂した。現在、ロシアで日本語をやっている人のほとんどはコンラードの孫弟子です。

スパルヴィン。この人は外語に来て 2 年ほど講師をやった時期もありますが、ウラジオストクの極東大学日本語科の産みの親です。

ラミング。東ドイツ科学アカデミーの会員で、やはり一時東京外国語学校の教師をやっていました。

民俗学の大家ニコライ・ネフスキー（Nikolai Nevsky, 1892-1937）。彼は柳田國男の盟友でもあります。日本語で『月と不死』とか、最近翻訳が出た『宮古島のフォークロア』といった書物を書いています。彼は 1915 年に留学生として来日し、大阪外語などでロシア語を教えるかたわら日本各地の民俗調査を行います。日本人(萬谷イソ)と結婚して、1929 年にソヴィエトに戻るのですが、日本のスパイということで粛清されます(1991 年に名誉回復)。

出典：ユーラシアブックレット 49
『明治日本とロシアの影』東洋書店

エリセーエフ(Sergey Eliseev, 1889-1975)。今でもモスクワとペテルブルクにエリセーエフ商会という高級食料品店があります。ドストエフスキーの作品にも出てきますが、その御曹司です。彼はペテルブルグで日本語を勉強し、その後 1908 年に来日して東京帝国大学国文科に入学する。そして夏目漱石の門下生になって、しょっちゅう漱石のところに出入りしている。彼がすごいのは、本による勉強だけでなく、芸者遊びをする。大金持ちの息子ですから、芸者と遊び、日本舞踊を習って、寄席通いもする。江戸時代の文化というものを身につけようとするのです。大変ハンサムな男で、日本髪結って、品をつけて踊っている写真があります。当時

の東京中の女性が憧れたというエリセーエフ。彼は帰国してペテルブルグ大学の日本語講師になるのですが、ロシア革命のあと1920年にフィンランドに亡命する。この間の苦難の生活を描いた『赤露の人質日記』は中公文庫で出版されています。その後パリに移り、パリのソルボンヌ大学日本語科の教授になります。レオン・ド・ロニーの時代から 50 年以上経って、エリセーエフが教授になるわけです。エリセーエフは 1932 年にハーバード大学で日本語科が創設された時アメリカに渡り、その学科長になります。ハーバードの日本語科を起こしたのはエリセーエフです。そして、その教え子が数十年前に日本に来ていたエドウィン・ライシャワー大使です。

メーチニコフにロシア語を習って、日本からロシアに渡った黒野義文。その黒野の教え子がハーバード大学へ行って、日本大使になるライシャワーを教えている。ぐるっと回っているというのは、ちょっと面白いじゃないですか。メーチニコフという人物が日本に来ていなかったら、たぶん東京外語のロシア語科はおかしくなっていた。それを一人の人間の力が盛り上げた。その功績はすごいと思います。

◇ユーラシア主義の探究

つい先日(2008 年 11 月)、招かれてモスクワに行ってきました。わずか一週間のモスクワ滞在でしたが、全体的に安定しているなという感じはしました。ただ目に付いたのは、やたらと街を掃除していることです。掃除をしている人たちの顔を見るとほとんどわれわれと同じアジア系の顔です。ウイグルとかキルギスとか、中央アジアから100万人規模で流入してきているらしく、そういう人たちが清掃員として働いています。ロシア連邦の人口の比率を見た時に、おそらくアジア系が相当増えているのではないかと思います。今も昔もヨーロッパを向いているロシア人は多いです。しかし、ロシア人の中にはアジア的なもの、東方的なものが入っています。ロシアの謎を解くためには、むしろそれを見据えた方がロシア人の素晴らしさが出てくると思います。ヨーロッパの後を追いかけるのは表面だけでいい。心までヨーロッパ化してしまうとロシアはロシアではなくなると思います。

もうひとつ心配なのは、今回、「ロシア世界」基金(2007 年プーチン大統領(当時)の発意により創設された)という団体に招かれてモスクワに行ったのですが、明らかに大ロシア主義を感じました。ロシア語・ロシア文化を中心にして帝国を統べようという発想の裏に、大ロシア主義を強く感じました。私はユーラシア主義というのを研究しているのですが、1920年代に起こったユーラシア主義と大ロシア主義はどう違うのか、きちんとしなければいけないというのが、これからの私のテーマです。これは日本でも、大東亜共栄圏の思想とその後の日本によるアジア侵略の思想とをどうやって分けるかという問題に通じます。日本の侵略的なナショナリズムと大東亜共栄圏の思想というのはそもそも違った意味を持っていたと思うのです。これまで日本の思想史では、ナショナリズムと一緒にされるのを警戒して、大東亜共栄圏の思想というものをきちんと検証してこなかった。それとパラレルな関係で、ユーラシア主義と大ロシア主義というものも、区別していかなければいけないと思っています。

◇おわりに　～ロシア留学を考えているあなたへ

レフ・メーチニコフと大山巌、あるいはその弟子たちのことを見ていると、外国に留学する場合、やっぱり「行こう」という強い意志がなければいけないと思うのです。目的がなくてもいい。何をやりたいかは、向こうへ行ったら絶対変わりますから。まず「行きたい！」という強い意志が必要です。ただし、心を広く開いていないといけない。向こうでせっかくいいチャンスがあっても、縮こまっていると吸収できません。もちろん用心もしなければいけないけれど、やっぱり自分の心をどこかで開いていないといけません。

日本にいると、自分の心を開いたり、性格を変えたりするのはなかなか難しい。留学という、つまり風土が違う所に行くということは、そこに染まることができます。赤が白になるとかいう極端なことではなくて、日本的なものを引きずりながらでも、どこか変わることができるはずです。日本にいたら、自分を変えるとか、考え方を変えるということは簡単にはできない。しかし、ロシアに行くと何かが変わると、そういう確信を持っているといいと思いますね。

それから、皆さん、想像力を持って、なおかつ好奇心を持ってください。あまり警戒ばかりしていると、何も得られない。プラス「偶然」があると思います。偶然を受け入れる心、やはり心が開いていないと偶然のチャンスをつかまえることができません。そういう意味ではロシアは他の国に比べて実に面白い。

「知ではロシアはわからない Умом России не понять」という有名な詩の一節があります。その通りです。理屈だけで考えてもロシアは見えてこない。その先に見えてくるものがロシアのいいところだと思います。　＜終＞

＜参考文献＞

東洋書店・ユーラシアブックレット 49『明治日本とロシアの影』(渡辺雅司著)
岩波文庫『回想の明治維新～一ロシア人革命家の手記』(メーチニコフ著、渡辺雅司訳)
講談社学術文庫『亡命ロシア人の見た明治維新』(メーチニコフ著、渡辺雅司訳

ロシアンカフェ in 中崎町

随分と前の話になりますが、2 月 8 日(日)にロシアンカフェへ行って来ました。JIC でも度々お世話になっている「ろしあん雑貨.com」の亀井店長がオーナーを務める、1 日限定オープンのカフェです。私は初めて行きましたが、このロシアンカフェは今回で 4 回目の開催だったそうです。

開催場所は大阪・中崎町。一見すると普通の住宅街に思える場所ですが、実は素敵なカフェや可愛い雑貨屋さん、美容院、古着屋さんなどがたくさんある場所なのです。今、若者を中心に人気のあるおしゃれスポットですね。

地下鉄谷町線の中崎町駅を出て少し歩くと…ありました、ロシアンカフェ。若干分かりにくく感じる場所でしたが、店内は大勢のお客さんで大賑わい。見事に満席でした。私は 4 人の友達と一緒に行ったので、何分か外で待つことに…。2 時間ほどしてようやくお店の中に入ることができ、楽しみにしていたロシア料理にありつけました♪メニューはボルシチ、ピロシキ、ペリメニ、ウォッカなどなど。白樺ジュースという珍しい飲み物もありました。迷いに迷った末、私たちはほとんどの料理を注文。一緒に行った友達も全員が留学などでロシア滞在を経験しているため、懐かしいロシアの味を楽しみました。料理は全て美味しい上に、価格もお手頃。最高です^^v。

店内にはロシアの可愛い雑貨がたくさん置いてありました。どれもこれも欲しくなって困りましたが、最終的にパスポートカバーとチョコレートを購入。パスポートカバーなんて、使うのかなぁ…という感じですが、ザ・ロシアなデザインに惹かれて衝動買い^^;。まぁ、これも記念です。皆さんはチョコエッグをご存知ですか？たまご型のチョコの中に、小さなオモチャが入っているお菓子です。カフェではチェブラーシカのチョコエッグを売っていたので、3 人の友達と一緒に買いました。中に入っているのはチェブラーシカのアニメに出てくるキャラクターのフィギュアなのですが、友達は 3 人ともチェブラーシカを当てたのに、私が当てたのはピオネール隊の少年…。ひどい、完全にハズレです…。

数時間の滞在でしたが、想像していた以上に楽しめたロシアンカフェ。またの機会に、みなさまも是非行ってみて下さい！！！　　（JIC 大阪　五十嵐　真夕）

お待ちかねJICフェアー@OSAKA

在阪のロシア(旧ソ連)人の方、ロシアファンの日本人、ロシア語を勉強中の方などがたくさん集まる恒例の JIC フェアー！情報交換もばっちり、ロシア語の腕だめしにもいかがですか？持ち寄り式のパーティーですので、お1人1品(食べ物・飲み物など)をお持ちください。調理室もありますので、温めたり盛りつけたりできます。お気軽にご参加ください！

日時：5 月 31 日(日)13:00 - 17:00
会場：ドーンセンター(大阪・天満橋)
参加費：お一人様 1,000 円
（当日受付にてお支払いください）
申込方法：参加者のお名前・電話番号を TEL・FAX・E-mail などで JIC までお知らせください。
TEL：06-6944-2315　FAX：06-6944-2318
E-mail：jicosaka@jic-web.co.jp

5月29日(金)締切！

ロシア文化フェスティバル IN JAPAN 2009 参加公演

レフ・トルストイ没後 100 年記念

名場面で綴るオペラ「戦争と平和」

セルゲイ・プロコフィエフ作曲　ピアノ伴奏上演　字幕付き

出演は世界の桧舞台で活躍するエレーナ・セミョーノヴァ(ナターシャ役)、アンドレイ・ブレウス(アンドレイ公爵役)等、総勢 14 名の実力歌手たちです。

日　時：2009 年 5 月 17 日(日)13:30 開演
会　場：昭和女子大学・人見記念講堂
チケット：2000 円(100 年記念の特別料金！全自由席)
申込み：名前、住所、電話番号とチケット枚数を明記して、NPO 法人「ヘラルドの会」まで FAX にてお申込み下さい。
(FAX：045-544-0933)
主催-昭和女子大学光葉同窓会
後援-ロシア大使館/日本トルストイ協会/日本ロシア文学会

上記公演の詳細と 5 月 22 日(金)の前橋公演については、
http://heraldblog.jugem.jp/・http://heraldgunma.web.fc2.com/

ロシア・旧ソ連製旅客機を訪ねて
～第3回　ヤコブレフYak-42～

鈴木 一・平井 伸彦

前回はツポレフ 154 を紹介したが、今回はヤコブレフ 42 でのフライトの様子を紹介したいと思う。1975 年に初飛行し、1980 年に路線就航した 120 席クラスの 3 発ジェット機で、第 1 回(インフォメーション 153 号)で紹介した、ヤコブレフ 40 の大型化機材として開発されている。ソ連末期に開発された機種で、現在も数多くの機体が現役で稼働しており、ロシアを中心に、旧ソ連諸国で活躍を続けている。2008 年にはカザフスタンの VIP 機として、またロシアからの個人チャーター機として日本にも飛来した実績がある。

～第 3 回　ヤコブレフ Yak-42D～
2008 年 10 月 15 日　タタールスタン航空 U9-369 便
モスクワ・ドモジェドヴォ空港→カザン

出発当日、いくつかの候補をつくって、航空会社のカウンターで航空券を買うことにした。第 1 希望は、タタールスタン共和国のカザンに向かうタタールスタン航空のフライト。カザンまでの空席を聞いてみると十分残っているとのことで、すぐに購入。チェックインカウンターでチェックインを済ませると、12E、12F の搭乗券が戻ってきた。予定ではツポレフ 134 とのことだったが、ヤコブレフ 42 に変更になったらしい。

セキュリティチェックを通過すると、ターミナルには多数のヤコブレフ 42 の姿がある。ヴォルガ・アビアエクスプレスやクバン航空、サラヴィアなど、恐らくこれから乗るであろうタタールスタン航空の機体と、運航が止まっていると思われるインターアビアの機体を含めれば、5 社のヤコブレフ 42 を見られたことになる。

＜ヤコブレフ Yak-42 の機内＞

カザン行きのタタールスタン航空 U9-369 便は、予想通りヤコブレフ 42 での運航で、RA-42433 のレジスタの機体だった。搭乗開始で機内へと入る。一応 2 クラスの客室になっており、全体的に客室が水色、シートモケットも水色、の青系の客室になっている。この色使いは、どちらかと言えばカザフスタンやウズベキスタンっぽい感じだ。ロシアの国内線とは言え、目的地はロシア連邦構成国のタタールスタン共和国の首都である。「スタン」の付く国らしく、イスラム教徒が多いそうだ。客室乗務員の方々の顔はロシア人というよりも明らかにアジア系であった。

＜ヤコブレフ Yak-42 の機体＞

座席の配置は 3-3 の横 6 列、頭上の物入れはツポレフ 154M と同様に蓋付きのタイプで、座席番号が蓋をロックする金具のところに書かれている。このあたり、物入れに蓋が付いていない、あるいは物入れそのものがないヤコブレフ 40 からすると、かなりの進歩を見せていると思う。トイレは後方に 2 箇所あり、ツポレフ 154 と同じタイプであった。

＜特徴的な丸窓＞

ヤコブレフの伝統なのか、丸い窓が特徴的である。日よけはツポレフ 154 と同じくスライド式になっていて、日よけのないヤコブレフ 40 よりはかなり進歩していることが分かる。

ドアクローズと同時に機内アナウンスが流れる。最初に聞きなれない言葉、続いてロシア語、最後に英語。最初の聞きなれない言葉はタタール語であろう。搭載しているエンジンはイフチェンコ製で、ヤコブレフ 40 の搭載エンジンと同じメーカーだが、音は明らかに違い、ツポレフ 154 ともまた違った音がしている。一方でヤコブレフ 40 にあった「ぽうん」と抜けたような音はしなくなっている。チューニングがかなり難しいらしく、タキシング（地上走行）中にノッキングしていた。

左側の国内線ターミナル側の滑走路を使うようで、空港内をゆっくりとタキシング。その間にシベリア航空のイリューシン(IL)86 やら、9 月末で倒産したエアユニオン系の機材、エンジンを抜かれた元 VIM 航空のイリューシン 62 などを見つつ、サラヴィアのヤコブレフ 42 に続いて離陸した。

水平飛行に入るとウェルカムドリンクのサービスが始まった。水と炭酸ジュースのセレクションで、炭酸は何だかよく分からない、第 1 回で紹介したウラジオストク航空のヤコブレフ 40 の機内で出てきたものと同じような感じである。機内食のサービスはなく、コーヒーとお菓子のサービスのみ。今回のロシア国内線で乗ったフライトの中では、一番しょぼい食事サービスであった。お菓子は袋に入ったチョコレートケーキだけ。これでサービスは終了で、ゴミ回収して終了。500 マイル以上、つまり東京～福岡に相当する距離なので、残りの時間は 1 時間近く。機内誌もロシア語のみで、時間をもてあますフライトとなってしまった感がある。

＜機内食＞

降下が始まってベルトサインが点灯する。雲が結構な高度まで立ち込めているので、多分天気はあまりよくないのだろう。雲が切れると、大地が見えてきた。カザン空港には定刻の 11 時を少し回って到着した。カザン空港に放置されているヤコブレフ 42 やイリューシン 62 などを眺めつつ空港ターミナルへ。ターミナルの一番端に駐機し、後部の引き込み式タラップ(エアステア)から降機となった。

空港ターミナルへはランプバスに載せられる。ターミナルに入ると、キリル文字で 2 行と、英語での表記になっている。最初の 1 行がタタール語、2 行目がロシア語らしい。復路の便の出発まで 3 時間ほど、空港で過ごすことにしよう。

＜ 続 ＞

＜ヤコブレフ Yak-42＞

1975 年初飛行、1980 年就航の 3 発、120 席クラスのジェット機。就航直後の 1982 年に、設計ミスによる墜落事故が発生し、1984 年まで運航停止になったが、その後不具合が解消され、2002 年までに 200 機ほどが生産された。旧ソ連以外ではパキスタンや旧ユーゴの国々、中国などでも使用された実績がある。改善型の Yak-42D 型は、ツポレフ Tu-154M 型と同様に、西側の騒音規制をクリアしており、旧ソ連の国々の航空会社を中心に現在も活躍を続けている。

JICモスクワ通信Vol.15 進化するロシア鉄道

皆さんは、ロシアは広いので、非常に広い範囲にわたって鉄道があるということをご存知でしょう。世界で一番長い鉄道であるシベリア鉄道も含め、国内を移動する際にロシア人はよく鉄道を利用します。飛行機より鉄道の方が運賃が安いことも重要な理由です。

ロシアは面積が広く、時間帯区分がいくつかありますが、ロシア国内を鉄道で移動する場合、鉄道のチケットに記載されている時刻はいつもモスクワ時間です。したがって、ウラジオストクの到着時間は、チケットに書いてある時間＋モスクワとの時差になりますね。しかし、ロシアから隣国のウクライナ、ベラルーシ、バルト三国などに鉄道で移動する場合は、チケットには現地の時間がきちんと記載されています。

ロシアから別の国への列車では、例えばお茶を飲みたいとき、ロシアの通貨ルーブルとその国のお金で購入できます。通常、国境を越えるのは夜中なので、夜中に両替屋が車両に入ってきたり、携帯電話のカードを売りにきたりします。もちろん手数料は高くつきます。

また列車停車中は、車内のトイレが使えないことが多いです。最近は綺麗で新しい列車ができ、その車内には豪華なホテルを思わせるデラックスなコンパートメントもあります。特に列車での長旅の場合は、便利で快適な列車を利用した方がいいでしょう。

最近は、ロシア鉄道 “РЖД(RXD) - Росстийские железные дороги” が非常に使いやすくなっています。チケットは、チケット売り場へ行って購入するだけでなく、インターネットでも購入できるようになりました。サイトに登録して列車を予約し、カードで支払いを済ませたら、駅の専用窓口で、列車が発車する直前まで受け取ることができます。受け取りの際にはパスポートの提示が必要です。また去年の年末からは、チケットを自動販売機で購入できるようになりました。インターネットで購入手続きをして、自動販売機でチケットを発券することもできます。インターネット購入の場合には、自動販売機で予約番号とパスポート番号を入力する必要がありますが、行列に並んで、やっと自分の番になったころにチケットが売り切れる、という事態は避けられるので便利ですね。ロシア鉄道は段々発展しているようです。　　(JIC モスクワ　トカチェンコ・ドミトリー)

ワガノワ・バレエ・アカデミー 来日 REPORT

浦林　裕理

すでに半年以上前の話となってしまいましたが、2008 年 7 月～8 月に、ワガノワ・バレエ・アカデミーが日本ツアーを行いました。もちろん、元サンクト・ペテルブルク在住のバレエファンとしては見逃せない、ということで公演にはもちろん足を運んだのですが、それ以外にもワガノワ・バレエ・アカデミーで副校長を務めているタチヤナ・ゴロヴィナさんの協力のもと、講演会を拝聴させていただいたり、レッスンを見学させていただいたりすることができました。折角の機会ですので、その報告をさせていただきます。まず今回は公演鑑賞とレッスン・リハーサル見学編です。

○　公演鑑賞　（8 月 2 日　オーチャードホール）

【第一部】

「クラシック・シンフォニー」　初級・中級学年による演目なので難しい技はありません。「あらまあ、可愛らしいわね～」というだけの作品なのですが、それでもついつい見入ってしまう可愛らしさです。

「ラ・シルフィード」　イリヤ・ペトロフとヴィクトリア・クラスノクーツカヤ、9 年生同士のペアです。クラスノクーツカヤは無邪気なかわいらしさがあって良かったです。一方、マリインスキーに採用されたイリヤ・ペトロフは、役柄によって印象が変わるのですが、ジェイムズ（「ラ・シルフィード」の主役）は残念ながらイマイチでした。

「シェヘラザード」　フィギュアスケート選手の安藤美姫選手やキム・ヨナ選手もプログラムに使用している、とても音楽が美しい作品です。そんな作品に挑戦したのは、9 年生のダリア・エルマコワとデニス・サプロン。キーワードが「官能」というこの作品、二人とも色々練ったんだろうなあ、というのは伝わるのですが、まだまだそれが馴染んでいませんでした。馴染んでいたらそれはそれで末恐ろしいので、馴染んでいなくても構わないんですが・・・（笑）。

「くるみ割り人形」　8 年生のタチアナ・チリグーゾワと、9 年生のドミトリー・チモフェーエフ。よくコンサートで踊られる 2 幕のパ・ド・ドゥ（デュエット）ではなく、1 幕最後のアダージョです。イマイチ見せ場がない演目なのが残念ですが、チリグーゾワは華やかなダンサーになりそうな気配があり、将来が楽しみです。

「眠れる森の美女」　ユリアナ・チェレシケヴィッチとセルゲイ・ウマニェツと、2 人とも 9 年生（現在はマリインスキー劇場で働いています）です。セルゲイ・ウマニェツは、個人的にとても期待しているダンサーです。膝を含め関節がやや堅めとか、そのためか跳躍の時キレイに 180 度開脚されない…など問題点はいくつかあるのですが、ソリストらしい風格があるところが貴重です。

「偶然の出会い」　ポルトガルの振付家による回転系の動きを多用した現代作品です。ロシアにありがちな「なんちゃってモダン」のうさん臭さはありませんが、今ひとつ洗練に欠ける…などという作品談義はさておき、踊ったのはオリガ・グロモワとワシリー・トカチェンコです。グロモワの方は、今まであまりワガノワ・バレエ学校の公演で観たことがなかったので、まじまじと観るのは初めてでしたが。素直そうな踊りで好印象でした。

「マルキタンカ」　別名、「ラ・ヴィヴァンディエール」（酒屋の娘の意）です。6 人で踊られる作品ですが、中心になるのはユリア・チッカとオレグ・デムチェンコ。チッカは現在ミハイロフスキー劇場（レニングラード国立バレエ）で、デムチェンコはマリインスキー劇場で働いています。個人的には、大変失礼ながらあまり容色は優れないものの上手な女の子が 1 人いたのが気になるのですが、名前はわからずでした。

【第二部】

「海賊」という人気のある古典バレエより、第 3 幕“花園の場”です。本来はヒロインであるメドーラが、さらわれてきた後宮で友達のギュルナーラに再会したところで、いつのまにか舞台はバレリーナ達がさざめき戯れる、後宮の主の夢の世界へ、という場面なのですが、今回はバレエ・アカデミー仕様になっています。具体的には、そんな男子禁制の場面では不公平？ということで、2 幕のグラン・パを織り込んで男性陣の出番を作っています。とはいえ、それでも増えたのはコンラッド（海賊の首領）とアリ（コンラッドの腹心）の二役だけという狭き門です。この日は、中家正博さん（アリ）とワジム・ベリャーエフ（コンラッド）がそれぞれ役を射止めました。よく言えばとてもお上品、悪く言えば若干物足りないワガノワ・バレエ・アカデミー男子生徒の中で中家正博さんのパワフルな踊りは人目を引きます。一方のベリャーエフはアリ役ほど目立つパートはなく、海賊と言うには優美すぎる気もするので別の作品で観たかった気もしますが、10 頭身？と言いたくなるほどプロポーション抜群で、今はマリインスキーで働いています。

そしてメドーラ役はアナスタシア・ニキーチナ。コンクールで入賞したりと、以前から注目されていた生徒でしたが、半年見ない間に「憎まれっ子世にはばかる」的な華が出ていてびっくりしました。当然のようにマリインスキーに採用され、すでにソロも踊っている彼女なので、個人的にはこのまま突き進んでいってくれれば面白いと思います。また、アカデミ

一用の演出、ということでメドーラのソロパートを分け合ったのがリリヤ・リシュク、またギュリナーラ役はナデジタ・バトエワが踊りましたが、まだ 8 年生ということで、ニキーチナに押され気味の感は否めませんでした。

また、群舞の中に前々から気になっていた 6 年生のクリスチーナ・シャプランがいたので嬉しかったです。もう一人 6 年生のオリガ・スミルノワも探してみたのですが見つからず、後で聞いたところ、怪我のためツアー不参加とのことでした。

○ レッスン見学とリハーサル見学 (8 月 3 日　ティアラこうとう)

【レッスン見学(全体レッスン)】

大ホールのステージ上でレッスンが行われるということで、客席の隅でこっそり待っていると、色とりどりの花が描かれた『海賊』の書割りを背景に、13:00 ごろからバーレッスンが始まりました。書割り同様、アカデミー生徒のレッスンウェアも色とりどりです。毎日着るとなると、私服感覚でいろいろアレンジしたくなるのでしょうか。ついでに、2 年生(11 歳)～9 年生(18 歳)までが同じステージでレッスンしているので、ダンサーの背格好もいろいろです。一応、2 年生から 9 年生まで同じ動きをなぞってはいるのですが、上級生はピルエット(コマの様に回る技の一つ)の回転数を増やしたり、キープを長めにしたりと、各自で難易度を調整していました。ただ、それだけではなく、音のとり方まで全くバラバラ好き勝手踊っているように見えるのは、それだけ個性をはぐくむ教育の成果という解釈でいいのでしょうか(笑)。

そんなステージの中、真っ先に、クリスチーナ・シャプラン(6 年生)とセルゲイ・ウマニェツ(9 年生)を探します。どうしてもお目当ての子から探してしまうようです。

まずはクリスチーナ・シャプラン。テクニック的に「私が主役よ。そこをお退き！」的な強靱さがないのが惜しいところです。でも彼女には、それはそれは美しいおみ足と可憐な雰囲気があります。アントルッシャ(垂直に跳躍しながら足を打ち付ける動きの一つ)では膝をきれいに伸ばし、正確なポジションにおりていたのが印象的でした。余計な筋肉はつきそうにない踊りですので、3 年後を楽しみに待とうと思います。

セルゲイ・ウマニェツは名教師・セリュツキーの教え子ですが、8 年生まではヒョロヒョロしていたのに、9 年生になってぐっと力強さが増したのだそうです。回転系は得意なようで、ピルエットも軸が定まっていて、綺麗に 5 回転していました。

【リハーサル見学】

いつの間にか舞台上から人が少なくなって、リハーサルに移行していました。前日に観たのとほぼ同じ演目のリハーサルが続きますが、「さくら」は初見でした。その他、「ラ・シルフィード」「偶然の出会い」「海賊」と続きます。最後まで見ることはできなかったのですが、完璧に踊る生徒、軽く流して踊る生徒とさまざまで面白かったです。また「海賊」では、ユリアナ・チェレシケヴィッチやクセニヤ・ロマショワなどもリハーサルを行っていました。後日キャスト表を確認したところ、別の生徒が踊っていたようなので、この日(楽日でした)のリハーサルの対象はよくわかりません。

嬉しかったのは、生徒に指導するアスィルムラートワが見られたことでしょうか。現役時代と変わらず、すらっとしてかっこいいです。舞台上で踊る生徒を、客席 10 列目センターあたりからダメ出ししていくのですが、熱が入るにつれ、どんどん前方に出て行きます。ちなみに、「偶然の出会い」あたりでは舞台の上に乗って生徒二人にお手本を見せていました。パンフレットに掲載されているインタビューでは、現代バレエに力を入れたいと語っていたアスィルムラートワなので、その表れなのでしょうか。

彼女に限らず、教師全般に言えることとして、指導内容はあくまでテクニカルなものが主で、抽象論が少なく、わかりやすいという印象でした。目指すものはもちろん「優雅」や「表現力」「音楽性」といったものなのでしょうが、それをいかにテクニックの問題にまで細分化できるか、というのが教授する上で大切な資質なのではないかと思いました。

2009 年 1 月のレニングラード国立バレエ来日公演では、ここでご紹介したダンサーもすでに何人か活躍していました。また、2009 年 11 月のマリインスキー・バレエでもここで挙げたダンサーが何人か来日すると思います。アカデミーを卒業してどんなプロのダンサーになっていくのか、成長を見守るのもファンの醍醐味の一つです。ここでお話したのはあくまで私個人の感想ですが、もし今後舞台で彼らの踊りを観る機会があれば、「あの時はバレエファンにああ言われていたけど今は…」と注目していただければと思います。

＜次号に続く＞

エクメネの最果てへ ―サハ共和国 冬の旅―

第1回

岡本 健裕

みなさんこんにちは。冬は寒いですね。一年で一番寒い季節に、せっかくだから世界で一番寒い町へ行ってみたいと思いませんか。思いませんね、大抵の人は。

今年の 1 月、そんな世界の「寒極の町」へ行ってきました。これから、その旅行記のようなもの書いてまいります。よろしくお願いします。

「世界一寒い町はどこか」という問題の答えは、一つではありません。どうやらオイミヤコンという村が 1926 年にマイナス 72℃なんていう、うそみたいな数値を出して、チャンピオンの座にあるらしいのですが、一方で、ヴェルホヤンスクという町で 1892 年に記録された 68℃（もういちいちマイナスをつけないことにします）という、やっぱり何かの間違いとしか思えない数値があって、これが世界一であるとする情報もあるのです。ただ確かなのは、どちらの町もロシア連邦の「サハ共和国」にあるということ。世界一寒い町は、少なくともサハ共和国の中のどこか、なのです。

サハ共和国って、ご存じでしょうか。実はシベリアの東半分のほとんどはサハ共和国の領域なんです。だからその広さも半端ではなくて、日本の総面積の 8 倍を超えます。サハ共和国が、諸外国からもその名称で呼ばれるようになったのは、比較的最近のことです。ソ連時代には、ヤクート共和国と呼ばれていました。大雑把に言えば、ヤクートがロシア語の名称、サハというのが現地語の名称です。現地語？！そうです、サハにはロシア語とは別に立派な自分達の言葉があるのです。それも遥か西からやってきた、トルコ系の言語です。話しているのはヤクート民族の人達。日本人にも似た、モンゴロイド系の顔立ちをしています。

どうですか、旅好きのみなさん、興味が湧いてきませんか、ワクワクしませんか（特に地理学的な意味で）。

2009 年 1 月 12 日、早朝 4:30、私はヤクーツクの空港に降り立ちました。この町はサハ共和国の首都、人口 20 万人を超える、サハ共和国ではぶっちぎりの大都会で、空の交通の玄関口でもあります。

ヤクーツクって実は日本から近いんですよ。もし直行便で行けたら、4 時間くらいで着いてしまう距離です。でも残念ながら定期直行便はありません。ではどこを経由して行くのがよいでしょう。今回使ったのは、モスクワ経由です。下図をご覧ください。あれ、何だか随分遠回りをしていますね。そう、直行すれば 4 時間の距離を、なんと地球半周分近く回り道をしました。日本を出てから、最短でも 3 日目の到着となる、長い長い道のりです。他にも、新潟から極東のウラジオストクやハバロフスクを経由しても行くことができますが、便数が少なくて接続が悪かったり、値段が高かったりして、モスクワ経由よりも使いにくいんです。一番ましなルートを選定しても、この不便さですから、サハ共和国への訪問がなかなか大変なことは、お分かりいただけるでしょう。

ヤクーツクの気温は 36℃。飛行機のタラップを降りながら早速、寒さの洗礼を受けました。地方空港らしく、ターミナル近くにスポットインした便の降機客は、エプロンを徒歩で到着口を目指します。

到着口に入って驚きました。ターミナルがありません。扉一枚くぐった向こうはもう空港の外、出迎えの人々は皆、酷寒の中を未明から屋外で待っているのです。その人並みの

中に、今回お世話になる現地旅行会社のスタッフ、サルダナさんの姿もありました。

サルダナさんはヤクート人の若い女性で、顔立ちがどことなく日本人にも似ている上に、きびきびと日本語を話すので、ここがロシアの一角であることを瞬間、忘れそうです。

案内された車は日本車、トヨタ製の真新しいワンボックスカーでした。サルダナさんによると、サハのオフロードでは、ロシア車ならウアズ（ＵＡ３）、外国車ならトヨタが圧倒的に信頼されていて、特に高級車需要はほぼトヨタ一択とのこと。冬のサハでは、車の故障が即、死につながります。そんな苛酷な環境で、文字通り命を預けるパートナーに選ばれているって、結構すごいことじゃないですか、トヨタさん。

ところでこの車、側窓には手製の改造が施され、即席の二重窓になっています。これは低コストながら大変効果的な一工夫で、車内保温はもちろんのこと、視界確保にも絶大な威力を発揮してくれました。

冬にロシアのバスに乗ったことがある方は、ご存知でしょう。窓から外はほとんど見えませんよね。凍りついてしまうからです。特に市内交通のバスは運転席周り以外に暖房がなく、完全に冷凍車になります。長距離のバスなら、客室にも暖房があるので、どうにか外が見えますが、それも停車中だけ。走り始めるともうダメで、バリバリと音を立てて、窓は氷の板に変わってしまいます。大体、外気温がマイナス 20℃を下回ると、ちょっとやそっとの暖房では、もう窓の凍結に抵抗できないようです。

そこで、サハでは初めから窓を二重にしてしまうのです。粘着テープがペタペタ見えていて、正直あんまり見栄えはよろしくないけれど、これはかなり快適です。周囲を見ると、ほとんどの車がこの改造を施している様子。どなたかメーカーにお勤めの方、使いやすくて見栄えのいい２重窓アタッチメントを酷寒地用に開発してみてはいかがですか。かなりニッチですが、きっと売れますよ。

さて、話が脱線しかけておりますが、このあと我々は、車の中でたっぷり１時間近くも待つことになりました。飛行機で預けた手荷物の受け取りを待っていたからです。

〈ヤクーツク空港駐車場〉

先に述べたように、この空港には国内線到着客用のターミナルが存在しないのですが、乗客が預けた荷物は受け取らなければなりません。さすがにそのための建物はありました。しかしこれが小さい。我々が乗ってきた便はボーイング 757 という、200 人以上乗れる旅客機だったのですが、この 1 便の乗客の荷物だけでもパンクしそうなほど処理能力が不足しているのです。しかも建物の出入り口は狭いのが 1 箇所だけで、出入りの集中により混雑、その上屋外は酷寒・・・。というわけで、長い待ち時間を快適な車内で過ごすことになったのです。到着早々、なかなかエキゾチックな洗礼を受けますね。

＜次号に続く＞

東京・銀座にペリメニ専門店を発見！

露餃庵（ペリあん）<前編>

店長の土谷さんよりヒトコト:

読んで字のごとく、完全なる当て字の露餃庵（ペリあん）。

ロシア水餃子の専門店です。もちろんアレンジいっぱいで、変わり餃子に変わりソースの数々・・・（内容は次回に続く）。手作りの皮のモチモチ感が自慢です。

ぜひ一度ご賞味下さい。

2006 年度の JIC 連続講座「ウォッカ講座」でおなじみのマスター、土谷博さんのお店『Bloody Doll』（東京都中央区銀座 7-4-7 小島ビル 2F）が毎週土曜日の 13 時～18 時の間だけペリメニ専門店に姿を変えます。

皮から手作りのペリメニとロシアビールのセットメニューもお勧めですよ。

ペリメニフリークのあなた、外堀通りから中央通り側に一本入った、通称ソニー通りで看板を探してみて下さい！

JICは頑張る人を応援します！

旧ソ連関係のイベント案内掲載をご希望の方は JIC までご相談ください。イベント時期の約２ヶ月前に情報をお送りください。JIC インフォメーションの発行は、１・２・４・６・９・１１月の６回となります。

掲載内容が JIC の活動に合わない場合はお断りする場合もありますのでご了承ください。

2009年4月開講

前期　全17回　途中入講可能！

JIC東京ロシア語講座

受講料：全 17 回　51,000 円
定員：1 クラス 4～8 名程度
会場：国際親善交流センター　東京オフィス
（東京・四谷）

＜入門＞月曜 19:00-20:30　ゼロからのスタート！1 年間かけてロシア語の基礎文法を勉強します。
＜初級＞火曜 19:00-20:30　ロシア語のやさしい読み物を読みながら、会話にも慣れていきます。
＜中級＞水曜　19:00-20:30　身近な出来事などを題材に、ロシア語の表現力を高めていきます。
＜文学講読＞木曜 19:00-20:30　小説を中心に授業をすすめます。学習歴 3 年程度以上のロシア語力の方対象。
＜時事会話＞金曜　19:00-20:30　新聞・ニュース・物語などを題材に総合的なロシア語力を高めることが目標です。
＜使える会話①＞土曜 10:45-12:15　ビデオを使って、より高いレベルのロシア語力を目指します。上級の方対象。
＜使える会話②＞土曜 12:30-14:00　ビデオを使って、よく使うロシア語を学びます。初級～中級の方対象。

詳細は JIC 東京オフィスまでお問い合わせください。複数講座同時受講割引もあります。ロシア語をはじめませんか？

2009年4月開講

前期　全15回　レッツ・トライ！

JIC大阪ロシア語講座

受講料：全 15 回　35,000 円
定員：1 クラス 5～10 名程度
会場：国際親善交流センター　大阪オフィス
（大阪・天満橋）

＜入門＞火曜 19:00-20:30　ゼロからのスタート！アルファベットや挨拶をはじめ、ロシア語の基本を勉強します。
＜初級＞木曜 19:00-20:30　ロシア語の文法をひととおり学びながら、会話も少しずつスタート。
＜中級＞金曜　19:00-20:30　会話のバリエーションを増やしましょう。総合的なロシア語力アップが目標です。
＜上級＞月曜 19:00-20:30　新聞を読んだりディスカッションをしたりします。会話力を磨きましょう。

詳細は JIC 大阪オフィスまでお問い合わせください。学生割引もあります。今年こそ頑張りましょう！

さあ、一緒にロシア語を学びましょう！ ～ロシア語講座の先生より～

世界地図を見て、みなさんはどの国を一番知りたいですか？東西の歴史が刻々と動いている国はどこだと思いますか？生きている政治、生の歴史に触れるのに絶好の国がお隣にあります。それはロシアです。ロシアは政治的にも、経済的にも、世界で重要な位置を占めています。ロシアにはロシア人だけでなく、100 を超える民族が住んでいます。ロシア語はこれら諸民族の共通語であり、ロシア語を通して少数民族の世界にも入っていけるのです。もちろん、そこから彼らの言葉を勉強していくことも可能です。戦争、宇宙開発、自然、貧困と経済発展、不安定な政情、ロシアの変化にはめまぐるしいものがあります。ロシア、ウクライナ、キルギスタン、グルジアにはどんな文化があるのか、明日はどう変わるのか、面白くて見逃せません。日ロビジネス交流も活発化しています。ロシア語を学んで世界の変化を直に感じ取ってみませんか。楽しみながら、この素晴らしい文化と芸術のことばを勉強しましょう！　　大阪クラス　入門・初級担当
アリョーナ・ゴヴォルノワ(Алёна Говорунова)先生

JICスタッフより★

JICロシア語講座・日本語講座は、各クラスそれぞれにカラーがあり、いろんな方が受講していらっしゃいます。ロシア語講座の教室からは楽しそうな声が聞こえ、和やかな雰囲気が漂っています。日本語講座はというと、こちらはこちらで日本語を真剣に学ぶ元気なロシア人受講生の声に、その活気をおすそ分けしてもらっています。

JICロシア語講座・日本語講座を受講される方はリピーターの方が多いんです！継続受講される方はもちろん、以前に受講されていた方が再び戻ってこられるというケースも珍しくありません。これには私達スタッフも毎回驚いています。

このようなわけで毎年 4 月新学期は、講座スタッフにとって、今年はどんな方がお申込みくださるのか大変楽しみです♪少しでも私たちのJICロシア語講座・日本語講座に関心をもっていらっしゃる方、ぜひ気軽にお問い合わせください！そしてロシア語、日本語の勉強はもちろんのこと、クラスでの楽しい時間を満喫していただきたいと思っております。みなさま、どうぞ宜しくお願いいたします！

（JIC 東京　藤枝　康子）

予告

夏の短期ロシア語研修旅行

ロシア人と仲良くなろう！ サンクトペテルブルグロシア語研修＆ホームステイ

成田・関空発　9月1日(火)～16日(水) 全16日間

成田発 ¥288,000-
関空発 ¥298,000-

旅行企画実施：ジェーアイシー旅行センター㈱
最少催行人数:6 名　添乗員:なし
ビザ代・取得代行手数料・空港諸税が別途必要となります。
申込締切：7 月 31 日（金）

～詳細はパンフレットをご請求下さい～

JIC 夏のロシア語グループ研修は、デルジャーヴィン・インスティテュートで学ぶ 2 週間のロシア語レッスン。放課後には、ロシア文化により深く触れることのできる課外授業をご用意。そして週末には、ピョートル大帝夏の宮殿やエルミタージュ美術館の観光など、サンクトペテルブルグの魅力が目白押し！！全期間、ロシア人家庭でのホームステイを体験できます。さらに、到着週の週末には、日本語を勉強しているロシア人と一緒に行動できる、交流プログラムをご用意しています！！ぜひご参加ください！

＊＊JICのロシア語研修＊＊

ロシア長期留学9月生・募集中

【期間】2009年９月より 10 ヶ月　　予価です！
【締切】2009年６月 15 日
モスクワ大学￥495,000（授業料 10 ヶ月）
ｻﾝｸﾄﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ大学￥493,000(授業料 10 ヶ月)
ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ極東大学￥350,000(授業料 10 ヶ月)
＊上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金及び取得手数料などがかかります。

ロシア語個人研修（随時募集）

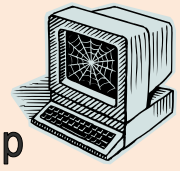
☆ﾓｽｸﾜ・ダリパス社　1 週間～4 週間　（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2or3 食付）
☆モスクワ大学　3 週間～長期（大学寮 1 人部屋）
☆G＆Rインターナショナル 1 週間～長期
（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2 食付/大学寮 2 人部屋）
☆ペテルブルグ・パートナー社　（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2 食付）
☆ペテルブルグ大学　1 ヶ月～長期
（大学寮 1 人部屋/2 人部屋）
☆ウラジオストク極東大学 1 週間～長期　（大学寮 1 人部屋）
☆ウラジオストク極東大学　1 週間～1 ヶ月　（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2 食付）
☆ビジット生活体験コース（ﾎｰﾑｽﾃｲ 3 食付）

ロシア語グループ&個人研修（随時募集）

リデン&デンツ　スイスの会社出資のロシア語学校。
個人・グループレッスン。モスクワとペテルブルグにあり、インターナショナルな雰囲気。初心者より上級者まで。２週間より可能。基本はホームステイ２食付。詳細はパンフレットをご覧下さい。

デルジャーヴィン・インスティテュート
全ロシアプーシキン博物館の協力により設立された学校で、18 世紀の建物内で授業が行われます。アットホームな雰囲気でお勧めです。グループレッスン、１週間より可能。基本はホームステイ２食付。詳細はパンフレットをご覧下さい。

JICのホームページをチェックしよう！
http://www.jic-web.co.jp



留学・研修各種パンフレットは JIC へご請求ください。留学・旅行相談お気軽に！

4~6月の予定

4月　6日(月)JIC 東京　ロシア語講座　前期スタート！
4月13日(月)JIC 大阪　ロシア語講座　前期スタート！
4月14日(火)JIC 東京　日本語講座　前期スタート！
4月25日(土)JIC 東京　留学相談会
5月16日(土)JIC 東京　ロシアンフェスタ
5月31日(日)JIC 大阪　ロシアフェアー　13:00-17:00
6月　6日(土)JIC 東京・大阪　留学相談会
最新情報は JIC のホームページに
随時掲載いたします。ご確認下さい！

Японский Язык

Краткосрочные курсы в центре Токио
Преподавание на русском языке
14 апреля начинается весенний семестр!
★ロシア語で教える日本語講座　2009 年度前期★
＜入門クラス＞12:30 – 14:00
＜中級クラス＞14:30 – 16:00
＜初級クラス＞16:30 – 18:00

日程:4 月 14 日(火)～7 月 10 日(金)までの火・金曜日
全 22 回(祝日、GW 期間はお休みとなります)
授業料:各クラス 66,000 円
会場:国際親善交流センター(JIC)東京オフィス　会議室

За дополнительной информацией обращаться –
TEL: 03-3355-7287 FAX: 03-3355-7285
E-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

留学相談会のお知らせ

JIC 東京・大阪各オフィスにて留学相談会を開催いたします。ロシア語留学・研修をお考えの方はお気軽にご予約ください！お仕事や学校で平日にお休みが取れない方はチャンスです。
◇4 月 25 日(土)13:00－16:00　(JIC 東京)◇
◇6 月 6 日(土)13:00－16:00　(JIC 東京・大阪)◇
要予約となっております！お問い合わせ・お申込は各オフィスまでお気軽にどうぞ。

ロシアンフェスタ 東京

ロシア連邦外務省付属ロシア国際文化科学協力センターとの共催で行っているロシアンフェスタ、今年は第 14 回目を迎えます。大使館付属学校の生徒さんのステージを楽しんだり、ロシアの方々と交流したり、楽しみ方はいろいろ。JIC スタッフによるロシア旅行・ロシア留学相談コーナーもありますので、この機会にぜひご参加ください！

日時：**5 月 16 日(土)13:30～**（13:00 より開場）
会場：**在日ロシア大使館付属学校**
参加費：一般 1,000 円　J クラブ会員 800 円
（当日受付にてお支払いいただきます）
申込方法：参加者全員の氏名・電話番号・住所を TEL・FAX・E メールで JIC までお知らせください。
申込先：国際親善交流センター(JIC)
TEL: 03-3355-7294　FAX: 03-3355-7290
E-mail: jictokyo@jic-web.co.jp
（定員になり次第締め切ります。お申込みはお早めに！）

◇◆編集後記◆◇

さあ、新年度がスタートしました。何か新しい挑戦をしたい、と考えている方もいらっしゃるのではないでしょうか？新しい言語を習ってみよう、お稽古をはじめよう、趣味をふやそう、体を鍛えよう・・・。私も新しく挑戦したいことは山のようにあるのですが、なかなか足を踏み出せずにいます。「○○をやってみたい」と他人に公言していると、どこからかきっかけが訪れる、と言われていますので、ぜひ試してみたいと思います。

それから、なんといっても継続することの大切さ。私が最近続けているのは登山でしょうか。春は(私も含め)花粉症の方にとっては少しつらい時期でもあるのですが、ひと汗かく気持ちよさ、景色のよさなど、やめられない要素がたくさんあります。でも一番のやめられない理由はほかに・・・。実は、登山用品はとっても高いんですよ。機能性に優れたものが多いので、基本的なものを買いそろえるだけで、たくさんの“諭吉さん”とお別れ・・・(涙)。これは続けなきゃいけないですよね。

皆さんも、やってみたいことに挑戦できるといいですね。

（JIC 大阪　小西　章子）

~Jクラブ（JIC友の会）のご案内~

ＪＩＣインフォメーションを年6回、またＪＩＣのイベント案内をもれなくお届けします。
ご希望の方には入会案内をお送りいたしますので、ご連絡ください。
国際親善交流センター